

ゴジラ映画における原子力描写

-核兵器と原発はどのように捉えられてきたか-

伊 藤 宏

ゴジラ映画における原子力描写

-核兵器と原発はどのように捉えられてきたか-

Atomic energy description in the Godzilla movie

-How have the nuclear weapon and the nuclear power generation been taken?-

伊藤 宏

Hiroshi Itou

要 約

本稿は、「水爆大怪獣映画」として 1954 年に公開されて以来、日本を代表するキャラクターとなったゴジラの映画シリーズを素材に、映画の中に登場する原子力描写の変遷を通して、日本社会が原子力関連技術をどのように捉えてきたのかを検証するものである。2016年に公開された『シン・ゴジラ』までの全 29 作⁽¹⁾において、原子力に関する描写がほとんどない作品が数作あるものの、ゴジラは何かしらの形で原子力と結びつけられ、核兵器あるいは原発などの原子力施設がそれと関連して描かれてきた。ゴジラの出自や体内構造、そして原子力、とりわけ「核」に関するストーリー上の対応などを辿っていった結果、初公開から 60 年余りの歳月を経る中で、時代背景を反映しながら原子力に対する社会の認識が大きく変化したことが明らかとなった。それと同時に、「核」をめぐる国際社会、そして日本社会が非常に危険な状況に置かれているという現状認識を得ることができた。

はじめに

ゴジラ映画における原子力描写について、私は 2005 年に「ゴジラが子どもたちに伝えたかったこと・映画に描かれた『原子力』を読み解く」⁽²⁾で一度検証をしている。そこでは第 1 作から第 28 作を対象とし、第 1 作こそ原子力についてのメッセージが凝縮されていたが、それ以降のゴジラ映画、特に第 5 作目以降は度々第 1 作への回帰が試みられたものの、結果的には「お子様ランチ化」し「シリアスな大人向け恐怖映画として出発したゴジラが、子供だましの怪獣プロレスへと凋落してゆく過程」⁽³⁾から逃れられなかったことにポイントを置いた分析をした。執筆から 14 年近く経ったが、2006 年には朝鮮民主主義人民共和国が初めて核実験に成功、また 2011 年には東日本大地震・大津波によって福島第一原発が史上最悪の事故を起こすなど、この間に原子力をめぐる状況は大きく変化している。

そしてゴジラ映画も 2016 年、第 28 作『GODZILLA FINAL

WARS』以来 12 年ぶりとなる、第 29 作『シン・ゴジラ』が公開されて大きな話題を呼んだ。また、ゴジラを対象とした研究論文や著作も、2005 年以降に数多く発表されている。それらにおける、ゴジラと原子力との関係に触れた知見には、私が見落としていた視点などが含まれていた。そこで、「ゴジラが子どもたちに伝えたかったこと」では割愛した部分を含めて、改めて全 29 作のゴジラ映画における原子力描写を検証し、その変遷を確認することが必要であると考えた。2005 年の論考では、子ども達へのメッセージ性を前提として描写を抽出していったが、本稿では原子力に関連した登場人物の台詞や場面を可能な限り詳細に抜き出していく。なお、『シン・ゴジラ』以降、2017 年から 2018 年にかけてアニメーション版の『GODZILLA』3 部作が公開されているが、今回は実写版のゴジラ映画に限定し、それら 3 作品は対象から除外した。また、これまでに公開されたハリウッド版のゴジラ映画(1998 年公開のローランド・エメリッヒ監督『Godzilla』と、2014 年公開のギャレス・エドワース監督『Godzilla』)も、本稿における対象からは除外した。

1. 強烈な反核メッセージを備えた第1作

第1作における原子力描写については、「ゴジラが子どもたちに伝えたかったこと」や「ゴジラが伝える日本国憲法の意義 -平和・反核・民主主義」⁴⁾で、ほぼ完全に抽出してきた。そこで本稿では、主演をレイモンド・バーとしてテリー・モース監督によって追加撮影が行われ、再編集された上で1956年にアメリカで公開された『Godzilla, King of the Monsters!』⁵⁾をオリジナルと比較するという手法で、改めて第1作に込められた反核メッセージの強さを明らかにしていきたい。

『Godzilla, King of the Monsters!』は、アメリカの新聞記者スティーブ・マーティンがカイロへ行く際に、友人の芹澤博士に会うために立ち寄った東京でゴジラに遭遇し、その体験を回想して語るストーリーになっている。それだけではなく、オリジナルの中で特に反米・反核を意識させるような場面はことごとくカットされているばかりか、使用する映像も順番が相当に入れ替えられていた。『Godzilla, King of the Monsters!』は、1957年に日本語字幕をつけて『怪獣王ゴジラ(海外版)』として公開されたが、吹き替えられた台詞を確認すると、オリジナルとは異なる箇所が多く見られる。当時の日本映画の海外契約は、全てフィルムの買い取り形式であり、フィルムの編集権は売却先の興行側にあったとはいえ、映画としては全く別物と言ってよいぐらいの内容の作品に変えられていた。『Godzilla, King of the Monsters!』は、アメリカのみならず世界50か国で上映されて人気を呼び、ゴジラの名前を広めることになったが、海外の人々は当時、これを日本で制作された第1作『ゴジラ』(以下、この章ではオリジナルと記す)と受け止めていたわけである。ちなみに、オリジナルが忠実に吹き替えられてアメリカで公開されたのは、なんと2005年になってからのことであった。

『Godzilla, King of the Monsters!』(以下、『海外版』)は焼け野原の東京が映し出されることから始まる。これは、オリジナルではゴジラが二度目の上陸で破壊の限りを尽くした終盤の場面だ。破壊された建物の一室で、瓦礫の中に倒れたマーティンの以下のようなナレーションから物語が始まる。「かつて人口600万を擁した都市、東京。その東京が想像を絶する破壊に見舞われ、今は廃墟と化した。東京を破壊し尽くした未知の力はまだ滅びることなく、いつ何時、他の国々をも襲うかもしれない。その姿を見た人も今はわずかしか生き残っていない。私はスティーブ・マーティン、アメリカの通信員だ。赴任地のカイロに行く途中、東京を訪れこの地獄に遭遇したので

ある」⁶⁾。この後、救出されて救護所に運ばれるまでが、オリジナルの映像と新たに撮影された映像を繋ぎ合わせる形で描かれる。

マーティンは山根博士とも旧知という設定で、救護所でボランティアをしている娘の恵美子を見つけ声をかける。この場面では、オリジナルに登場する恵美子と同じ服を着て、常に後ろを向いている女優(おそらくはアメリカの女優)が演じている。同様の手法は、後々の場面で山根博士や芹澤博士についても用いられた。また、恵美子の顔を正面からとらえたオリジナルの映像が使われた際には、恋人の尾形に「ええ、芹澤さんと約束したことがあるんです」と語っていたものに、「ええ、今、保安庁の人と会ってますわ」と全く異なるストーリーに合わせた台詞が英語でかぶせられていた。いわゆる「ボイス・オーバー」と呼ばれるものだ。この手法が全編にわたって多用されていることも、『海外版』の大きな特徴であろう。

また、『海外版』では新たに撮影された場面や、吹き替えを施した場面以外は、音量が絞られてはいたものの、オリジナルの場面の音声そのまま残されている。『海外版』において「相次ぐ遭難に対策を求める声が高まり、学者たちが招集された」という場面があるが、そこで用いられたオリジナルの映像はゴジラが存在が確認された後の場面であった。『海外版』では原因不明の状態であったはずなのに、「山根博士、率直に申し上げます。いかにしたらゴジラの生命を絶つことができるか。その対策を伺いたいのです」「それは無理です。水爆の洗礼を受けながらも、なおかつ生命を保っているゴジラを、何をもって…」という台詞がはっきりと残されている。アメリカで公開された際、日本語に堪能な観客であれば唐突に出てくる「ゴジラ」「水爆」という言葉に戸惑ったはずだ。この会話を「よく聞き取れないが…」とするマーティンに、同行していた海上保安庁の岩永は「博士が近くの島へ聞き込み調査に行け、と。現場水域に一番近いのは大戸島です」と通訳する。この際、オリジナルの映像では山根博士が「まずはあの不思議な生命力を研究することこそ…」と語っており、それがはっきり音声で確認できてしまうのだった。

おおよそ、以上のような手法で制作された『海外版』であるため、作品の中の矛盾や明らかな誤り(巡視船「しきね」に乗船しているという設定であるのに、マーティンの背後の浮き輪には「かもめ丸」の表記があることなど)が数多く指摘することが可能だ。しかし、それは本稿の目的ではない。大きな問題は、原子力に関連した場面について、カットや吹き替えが顕

著であったことである。時には、オリジナルとかけ離れたような吹き替えも頻りに登場している。以下、その中でも特に大きな変更部分を挙げておく。

『海外版』は「飛行機で日本に向かっていたのは、ほんの数日前だ…」というナレーションから、マーティンの回想が始まる。機中でくつろぐマーティンが描かれるが、「そしてその同じ頃、1万フィート下の海で、文明の土台を震撼させる事件が起きていた」というナレーションと共に、オリジナルの冒頭の場面、つまり最初に日本の貨物船が沈没する場面が、ようやく登場する。この場面はほぼオリジナルのまま使用されているが、一つだけ手が加えられていた。オリジナルでは海面が白く盛り上がりつつある際、効果音は雷鳴のような爆発音のみであったが、『海外版』ではゴジラの咆吼と足音が加えられている。これは私の推測だが、オリジナルのままではこの時点で水爆以外に連想できないため、ゴジラの咆吼などを加えることによって沈没の原因が怪獣であることを強調したかったのではないだろうか。

次に大きく手が加えられていたのは、大戸島の調査でゴジラと遭遇した山根博士が、国会で報告する場面だ。オリジナルでは、「おそらく、海底の洞窟にでも潜んでいて、彼らだけの生存を全うして、今日にまで生きながらえておった。それが度重なる水爆実験によって彼らの生活環境を完全に破壊された。もっとくだけて言えば、あの水爆の被害を受けたために、安住の地を追い出されたと見られるのであります」とし、「ガイガーカウンターによる放射能検出定量分析によるストロンチウム90の発見。つまり、ゴジラに付着していたこの砂の中に、水爆の放射能を多量に発見することができたのであります。これらの物的根拠からして、ゴジラも相当量の水爆放射性因子を帯びているとみることができます」と、ゴジラが水爆実験によって生み出された怪物であると断定している。だが『海外版』の同場面での山根博士の発言は「極めて稀な自然現象によって再現した可能性も考えられますが、今までそんな例は一度もありません。足跡に残った放射能を分析すると、水爆から発生するストロンチウム90が見つかり、ゴジラの復活は度重なる水爆実験の所産かと思われまます」と吹き替えられている。

オリジナルではこの後、「あのゴジラなる代物が水爆実験が生んだ落とし子であるなどという…」。「その通り！その通りじゃないかっ！」「そんなことをだ。そんなことを発表したら、ただでさえうるさい国際問題がいったいどうなるか」「事実は事実だ！」「だからこそ重大問題である。軽率に公表した暁には、

国民大衆を恐怖に陥れ、ひいて政治、経済、外交まで混乱を引き起こし…」というように、政治家同士の激しい応酬が描かれている。また、ゴジラの存在が公表された後、電車の中での男女の会話として「いやね。原子マグロだ、放射能雨だ…そのうえ、今度はゴジラときたわ。もし東京湾へでも上がり込んできたら、いったいどうなるの？」「まず真っ先に君なんか狙われるクチだね」「いやなこった。せつかく長崎の原爆から命拾いしてきた大切な身体なんだもの」という場面があるが、いずれも『海外版』では全てカットされている。

紙幅の関係上、ここで詳細は述べられないが、「オキシジェンデストロイヤー」の開発や使用をめぐる苦悩する芹澤博士を描く場面も大幅にカットされるか、台詞が変更されていた。例えば、芹澤博士の「もしも一旦このオキシジェンデストロイヤーを使ったら最後、世界の為政者たちが黙って見ているはずがないんだ。必ずこれを武器として使用するに決まっている。原爆対原爆、水爆対水爆、その上さらにこの恐怖の武器を人類の上に加えることは、科学者として、いや一個の人間として許すわけにはいかない。そうだろう？」というオリジナルの台詞は、『海外版』では「だが、これが悪人の手に渡ったらどうなる」というだけの台詞に吹き替えられている。山本昭宏は「ゴジラの最期にも、当時の核兵器に関する意識が投影されている。(中略)新兵器を開発した科学者は、この兵器が悪用されるのを防ぐために設計図を焼き、さらに自らの脳内に残る設計図を破棄するために、『ゴジラ』とともに海に消えるのである。新兵器の使用と廃絶を同時に描いたラスト場面には、核兵器への批判と廃絶の祈念が込められている」¹⁰としているが、芹澤博士の台詞が大幅にカットされた『海外版』からはそれを読み取ることはできなくなっていた。

そして極めつけは、オリジナルにおいてテーマの集約とも言える、ラスト場面における山根博士の台詞の扱いであった。オキシジェンデストロイヤーによってゴジラを葬った後の船上で、山根博士は「あのゴジラが最後の1匹だとは思えない。もし水爆実験が続けて行われるとしたら、あのゴジラと同類が、また世界のどこかへ現れてくるかもしれない」と語るのだが、『海外版』ではこの部分は丸ごとカットされている。「ゴジラは死にました。これからは国土の再建です」というニュースのアナウンスが流れ、その後の尾形と恵美子のやり取りは描かれているのだが、最後はマーティンの「脅威は去った。偉大な男も。そして地球は救われた」というナレーションで映画は終わる。『海外版』において変更が加えられた部分は、そのほ

とんどがオリジナルで主張された反核のメッセージに関わるものであった。『海外版』が公開された1956年当時は、オリジナルを忠実に吹き替えたものはアメリカでは到底、受け容れがたい内容だったことがわかる。裏を返せば、オリジナルに込められた反核のメッセージが、いかに強烈なものであったのかを改めて知ることができるのであった。

2. 第1期前半における原子力描写

ゴジラ映画には3つの区切りがあるとされる。好井裕明は「第1期は、1954年の第1作から1975年の『メカゴジラの逆襲』まで。1984年12月に『ゴジラ1984』で復活し、1995年12月の『ゴジラ vs デストロイア』までが第2期。1999年12月の『ゴジラ2000 ミレニアム』から『ファイナルウォーズ』までが第3期だ」⁸⁾としている。その区分にしたがって、原子力描写を抽出していく。なお第1期については、ゴジラが人類の脅威として描かれた第5作までを前半、ゴジラが人類の味方として描かれた第6作以降を後半と分けて検討することとした。

961万人という観客動員数を得た第1作『ゴジラ』の大好評を得て、その翌年に第2作『ゴジラの逆襲』が公開された。これは前作の続編という形を取っているが、原子力関連の描写はごくわずかであった。それはゴジラともう一匹の怪獣を目撃した月岡正一と小林弘治の証言後の、以下のやり取りである。

田所: そうですね。そうすると山根さん。やはり我々の想像が的中したわけですね。あらゆる想像の中で最も悪い場合の想像が…。

山根: (うなずく)

総監: するとゴジラの他にもう一匹というのは？

田所: そうですね。水爆実験がゴジラを呼び覚まし、今度はまたアンキロサウルスの眠りを覚ましたんです。

(山根博士がゴジラの東京襲撃の様子を収めたフィルムを一同に見せた後)

山根: 今ご覧になりましたように、我々の武器、我々の知能を結集いたしましても、あの恐るべき放射性因子を帯びた凶暴なゴジラの行く手を阻むことは、できなかったのであります。

隊長: しかし先生、そのゴジラを一挙に抹殺したという…。

山根: そうですね。オキシジェンデストロイヤー。あのゴジラを一瞬にして東京湾の海底に葬り去ったオキシジェンデストロイヤーも、その発明者、芹澤博士と共に今はなく、ゴジラ抹殺の手

段は絶望と申すより仕方がないのであります。

総監: 博士。ではゴジラは、あの一匹だけではなかったんですな。

山根: そうですね。我々はそれを一番恐れておったのですが、今回は第2のゴジラと共に新たに出現したアンギラスの脅威。我々は今や、原水爆以上の脅威の下にあると申さねばなりません。

総監: しかし博士、何とか被害を最小限に…。

山根: そうですね。今はそれだけしか考える道はありません。そのためには彼らの現在位置を確認して、上陸地点を予知すると同時に、付近住民を退避させ完全なる灯火管制を行う。それから、これは東京に上陸した際の状況などから判断して言えることですが、ゴジラは光に対して非常に敏感で、と言うより甚だしい激怒に燃える。それは、かつての水爆実験の記憶を呼び覚まされた結果かと想像されるのですが、光に対して不思議な習性を持っている。で、この習性を逆に利用する方法として考えられますことは、事前に照明弾でも投下してゴジラを遠く海上へおびき出す。ただ今のところ、甚だ消極的な対策しか考えられませんが、灯火管制だけは絶対に実施していただきたい。

第2作の原子力描写は、ゴジラと、この作品で登場するアンギラスの出現などについて、水爆実験と結びつけて語られたこの場面のみである。

約7年のブランクを経て1962年に公開された第3作『キングコング対ゴジラ』では、冒頭部分で、北極海に国連派遣の科学者を乗せて調査に向かう「原子力潜水艦シーホーク号」が、青白く光る冰山を発見した際に、以下のようなやり取りがある。

艦長: 博士。あれは何ですか？

博士: チェレンコフ光のようです。

艦長: チェレンコフ光？ 何ですか、それは？

博士: 原子炉に発する光です。よく似ています。

乗員: 艦長、ガイガー反応あり。

その後、シーホーク号が冰山と衝突した際には、

艦長: 各部、異常知らせ！

乗員: 機関部異常なし、原子燃料庫異常なし、水中潜望鏡破損…。

というやり取りがあり、さらに大破して遭難しかけた際には以

下のようなやり取りがあった。

乗員：艦長。ガイガー異常反応あり。

博士：捜索隊が出ているはずですよ。彼らに頼るほかありません。

乗員：艦長！レーダー故障！

乗員：原子燃料庫破損！

艦長：遮断壁おろせ！

その後シーホーク号は沈没し、氷山からゴジラが姿を現す。ゴジラ出現を報じる新聞記事には「ゴジラ本土に上陸か」「動物の帰巢本能」「重沢博士の予言」(東都日報)、「ゴジラ来襲は確実」「放射能に決め手なし」「水爆使用の問題」(関東新報)の見出しが並んだ。

そして出現したゴジラへの対応をめぐる、以下のようなやり取りがある。

司令官：国連では、このままゴジラを放置しておくことは世界の破滅になる。よって世界平和のため水爆攻撃の計画を考慮してほしい、という声が上がっているようだ

士官：いや、先に決定を見た埋没作戦と 100 万ボルト作戦があります。この結果を見てからでも決定はできます。

一方、第3作では核兵器や放射能といった負のイメージだけではなく、藤田一雄が開発した新製品について「鋼よりも強く、絹糸よりもしなやか。原子力時代の繊維ですよ」と、原子力を肯定的に捉える描写もあった。第3作はゴジラ映画初のカラー作品ということ、また東宝創立30周年の記念作品ということもあって、ゴジラ映画シリーズ最高の1255万人の観客動員数を獲得している。

1964年公開の第4作『モスラ対ゴジラ』では、まず酒井・三浦・中西が最初に小美人と遭遇した際、次のようなやり取りがある。

小美人：私たちインファント島から来たんです。どうか私たちの卵を返してください。

三浦：インファント島って、昔、原水爆実験で有名な南海の孤島でしょう。

小美人：そうです。

酒井：じゃ、あの静之浦の卵、君たちのもの？

小美人：ええ、モスラの卵です。

酒井：モスラ？ 信じますか？

三浦：ううむ…

中西：でも話は聞くべきよ。ね、話してみて。

小美人：ありがとう。インファント島は昔の原水爆実験で見る影もなく荒れ果てた島になってしまったんです。そして、今度の台風で山津波のためにモスラの卵が海に流されてしまったんです。土の中で何年も何年も…やっとな大きくなった卵です。荒れ果てた島に住む住民にとっては、かけがえのない希望なのです。お願いします。どうか皆さんのお力で卵を返してください。

また、台風被害の現場で酒井と中西が見つけた物質をめぐる、2人が三浦に呼び出された際、次のような会話が交わされた。

酒井：一体何のまねですよ、こりゃあ？

三浦：放射能の洗浄だよ。

酒井：放射能？

三浦：うん。でも心配はないようだ。

酒井：冗談はよしてくださいよ。

三浦：冗談じゃないよ。君たちが持ってきたアレね…。

酒井：何か分かりました？

三浦：まだ分かん。すごい放射能を帯びているんだ。

三浦が物質にガイガーカウンターを向けると強く反応する。その後、物質が見つかった干拓地に出向き周辺を検査するが、反応がない。放射能のマークがついた旗やボンベが運び込まれる。視察に訪れてその様子を見た議員との間で、以下のようなやり取りがなされる。

議員：君たちは何を検査しとるんかの？

(中略)

酒井：いやいや、今日は取材で来たんじゃないんです。

議員：じゃあ、何なの？

酒井：放射能の検出です。

議員：放射能じゃて？ 原爆の実験場と違うぞ、ここは。おめえたちはこの干拓地に、ケチをつけに来たのかい。

三浦：待ってください。学術的調査ですよ。

議員：学術的調査が何じゃい。ここは我が県が、宝の山にしようとしとる工業地帯だ。嫁入り前の娘にキズをつけるようなことせんとしてもらいたいの。

酒井：いや、ケチなんかつけに来たんじゃないと言ってるでしょう。

議員：とにかく無断調査はお断りだ。

三浦:わかりました。帰ろう。

その直後、干拓地の地面が動き、水蒸気のようなものが吹き出しゴジラが出現するが、その際に三浦がガイガーカウンターを向けると強い反応が出る。

出現したゴジラへの対応として、モスラの力を借りることが提案され、酒井・中西・三浦は助けを求めるためにインファント島に向かう。上陸すると、そこには動物の骨などが散乱する風景が広がっていた。それを目にして3人は以下のような会話を交わす。

酒井:すごいなあ。こんな所に人が住んでるんですかね。

中西:原水爆実験のためなんですか？

三浦:分かりやすく言えば、後遺症とも言えるのかなあ。昔は全島緑の美しい島だったろうにね。

(ここで三浦が地面などにガイガーカウンターを向けると強く反応する)

中西:何だか私、責任感じちゃうわ。

三浦:人間なら当然ですよ。

酒井:しかし、原水爆禁止のかけ声も、近頃じゃ耳にタコって感じだが、こう目の前に見せつけられるとそうじゃないですなあ。

(島の内陸に入り、改めて周辺を見渡した後)

しかし、本当に人が住んでいるんですかねえ。

三浦:こんな所に住まなきゃならないなんて、残酷以上だなあ。

その後、島の住民と遭遇し、連れて行かれた先で長老との間で以下のような会話が交わされる。

三浦:実は、モスラの力を借りに来たのです。

長老:断る。モスラの力、貸せぬ。

三浦:しかし、我々の仲間がゴジラのために危機に陥っているんです。

長老:悪魔の火弄んだ報いだ。我々は知らん。昔、この島いとこだった。平和な緑の島だった。それを、悪魔の火焚いたのは誰だ。神も許さぬ火焚いたのは誰だ。その日から、この島は受難の島になった。我々、この島以外の人間信じない。信じたばかりに、今まで背かれてばかりきた。モスラの卵、返さない。

第4作と同年に公開された第5作『三大怪獣 地球最大の決戦』では、ゴジラとラドン、さらに宇宙怪獣キングギドラが出

現したことを受けて、以下のようなやり取りがあった。

議員:ゴジラ、ラドンに加えて、またまたキングギドラの出現。一体、政府はこの事態に対して、いかなる対策を持っておられるか。防衛大臣ならびに総理の責任ある答弁をお伺いしたい。

防衛大臣:えー、防衛軍といたしましては、目下全力を挙げてゴジラ、ラドンの行動を厳重に監視しつつ、キングギドラに対しましては国際合同軍と緊密なる連絡のもとに、人力の及ぶ限りこれを速やかに撃滅いたすべく行動中でございます。

議員:言い訳を聞いているんじゃないぞ。

議員:どうして撃滅するのか、その自信があるのかないのかを聞いているんだ。

防衛大臣:問題は日本一国の問題ではございません。全世界の問題でございます。諸君はゴジラ、ラドンに対して核兵器を使用せよと言う勇気がございますか？ もうこれ以上ご説明申し上げる必要もございませんまい。ただただ、最後まで人力を尽くし天命を待つ心境でございます。

最終的に、ゴジラとラドンはモスラの説得を受けて、3大怪獣が協力してキングギドラを撃退することになる。

3. 第1期後半における原子力描写

1965年に公開された第6作『怪獣大戦争』では、まず宇宙ロケットP-1号がX星に着いた際、富士が「放射能は？」と問い、グレンが「なし」と答える場面がある。また、X星人が指摘した明神湖にゴジラがいるかどうかを確認する際に自衛隊員の間で以下のようなやり取りがあった。

隊員:隊長！

隊長:何だ。どうした？

隊員:放射能がますます強くなってます。

そして、そのことを伝える新聞記事には「明神湖々底に放射能・第一調査隊報告」「ズバリ当る、X星人の予言」「ゴジラ存在は確実」「ラドン発見も時間の問題か」という見出しが躍った。

さらに、X星人が地球侵略の意図を明らかにし、ゴジラとラドン、キングギドラを操って降伏を迫ってきた際に、以下のようなやり取りがあった。

桜井:アメリカにキングギドラが現れたそうだな。何ということ

だ。

富士: どんどん情報が入ってます。で、防衛会議の結果は？

桜井: まだ出ない。防衛軍は現在地球が保有してる水爆を撃ち尽くしても、最後の抵抗を試みるべきだと言っとるがね。

富士: それじゃ放射能で我々の生存も難しいですね。

桜井: いずれにしても、前門の虎後門の狼というところだな。

その後、地球側はゴジラとラドンをX星人のコントロールから取り返し、キングギドラを撃退した。

1966年に公開された『ゴジラ・エビラ・モスラ 南海の大決闘』では、レッチ島にある陰謀団「赤い竹」の基地に侵入した際、以下のようなやり取りがある。

吉村: さあ来い！ こっち！ ここから逃げよう。

仁田: ダメだ、ダメだ。入るな！

吉村: どうした？

仁田: 核融合室だ。驚いたな。ここは重水工場だぞ。

市野: 重水って何だい？

仁田: 核爆弾のもとだ。

市野が「赤い竹」に捕まるなどした後、吉村たちが島の洞窟に眠るゴジラを発見した際には、以下のようなやり取りがあった。

仁田: ゴジラが生き返ったら、奴らはきっと慌てる。

吉村: いや、そりゃダメだ。

仁田: どうして？ 奴らはこの島で密かに核兵器を作ってるんだぞ。人類の平和をブツ壊そうとしてるんだ。

吉村: そりゃゴジラだって同じだ。

結局、吉村たちはゴジラを蘇らせる。そしてゴジラの襲撃を受けた「赤い竹」は「全島爆破。核爆発、時限装置！ 撤退準備！」という決断をし、核爆発のカウントダウンが始まってしまった。吉村たちは爆発寸前にモスラによって救出される。ラスト場面では、爆発する島を見下ろして、次のような会話が交わされた。

吉村: これであの島も地図から消えたわけか。

仁田: しかし、原水爆の火は消えない。これからは使う人間の良心の問題だな。

吉村: 何だか説教されているみたいだな。

1967年に公開された第8作『怪獣島の決戦 ゴジラの息子』では、ゾルゲル島における合成放射能ゾンデを利用した気

象コントロール実験「シャーベット計画」をめぐる以下のようなやり取りがある。

楠見: シベリアのツンドラ、アフリカの大砂漠、南米のジャングル地帯。もちろん現在のままでは不毛の土地だ。しかし、気象コントロールによってそれらの土地を農地に変えることができれば、食糧危機は解決できる。

(中略)

真城: 一つ分らんことがあります。そんなに意義のある実験を、なぜ秘密にするんですか？

楠見: 分らんかね。悪用すれば地球を凍結させることだってできるんだ。その結果は、核兵器の使用と同じことになるだろう。

その後、計画は実施されるが、1回目の実験では放射能ゾンデが予定高度より低い位置で爆発してしまい、島は「いまだ人類の経験したこともない、摂氏70度という異常高温の渦中に巻き込まれ」てしまう。その結果、島に棲息する大カマキリが巨大化するが、それについて楠見が「異常高温と合成放射性物質で、生体構造に変化をきたしたんだろう」と解説した。

1968年に公開された第9作『怪獣総進撃』では、月ロケットムーンライトSY-3が何者かに占拠されたとみられる怪獣ランドに進入した際に、「放射能、亜硫酸ガス、その他異常なし」と確認する場面があったのみである。1969年に公開された第10作『ゴジラ・ミニラ・ガバラ オール怪獣大進撃』では、オープニングのテーマソングの歌詞に「ゴーツ、ゴーツ、ゴジラは放射能。ミ、ミ、ミニラもボーッ、ボーッ、ボーッ」とあった以外、原子力関連の描写は全くなかった。

1971年に公開された第11作『ゴジラ対ヘドラ』では、まずオープニングのテーマソングに

水銀 コバルト カドミウム
鉛 硫酸 オキシタン
シアン マンガン バナジウム
クロム カリウム スロンチウム
汚れちまった海 汚れちまった空
生き物皆 いなくなつて
野も 山も 黙つちまった

という歌詞が登場する。また主人公の少年が書いた詩に、

原爆 水爆 死の灰は 海へ
毒ガス ヘドロ みんなみんな海へ捨てる

おしっこも
ゴジラが知ったら
怒るかな
怒るだろうな

というくだりがある。さらに、ヘドラが飛行体に変化した原因について、親子で次のような会話が交わされた。

矢野徹: 研、核爆発って知ってるか？

矢野研: 原爆や水爆のこと？

矢野徹: 物質の原子が核分裂を起こして別の原子に変わる時、膨大なエネルギーを放出するんだ。宇宙には原爆や水爆どころか、太陽の何億倍もの大爆発が起こってる。

矢野研: バーン！ すごいなあ。

矢野徹: ヘドラは核爆発によるエネルギーで飛ぶようになったら。金属で出来た宇宙生物だからね。放っておくと、どんな武器を備えるか分からない。

1972年に公開された第12作『地球攻撃命令 ゴジラ対ガイガン』では、M宇宙ハンター星雲人が、次のように語るくだりがある。「全宇宙から見れば、君たちが住んでいるような星は1つではない。地球と同じ条件の星は他にいくらでもあるのだ。我々の住んでいたM宇宙の星もその1つだった。いや、地球よりもっと条件の良かった星だった。そして君たち人間と同じような動物が星を支配し栄えた。だが彼らの生命は20億年で死滅した。無謀な繁栄を追究したためにだ。もう1億年も前の話だが、大気は汚れ、酸素は欠乏し、鉛と放射能の星になった。言っても分からないだろうが、地球はそれと全く同じ道を歩いている」。そして、全ての戦いを終えたラスト場面で次のような会話が交わされた。

志摩マチ子: 平和って、なかなか難しいものね。

志摩武士: 科学が発達すると便利になるが、それだけ平和が遠のいていきそうだよ。

1973年に公開された第13作『ゴジラ対メガロ』では、冒頭に次のようなナレーションが流れる。「197×年、アリューション列島の外れの小島で、第2回地下核実験が行われた。その結果…」次の瞬間、島が核爆発を起こす。さらにナレーションは「その核実験の影響は、遙か南の怪獣島にまで及んだ」と続き、怪獣島でゴジラたちが悶える様子が描かれた。また、シートピア海底王国のリーダーが「諸君。我がシートピア海底王国は、300万年にわたって平和を守ってきた。その平

和が、地上人の無謀な核実験で遂に破られたのだ。北地区は完全に壊滅してしまった。我々はシートピアを守るために、やむを得ず地上人と戦う決心をした」と演説する場面がある。

1974年に公開された『ゴジラ対メカゴジラ』および1975年に公開された『メカゴジラの逆襲』では、原子力に関する描写はほとんどなく、後者の中でゴジラを探索するためにブラックホール第3惑星人が「スーパーガイガー探知機」を使用するというぐらいであった。そして、『メカゴジラの逆襲』は観客動員数がゴジラ映画史上最低の97万人にとどまり、ゴジラは一旦銀幕から姿を消した。

4. 第2期における原子力描写

1984年に公開された第16作『ゴジラ 1984』は、漁船の第五八幡丸の遭難事件から始まる。生き残った奥村宏の証言から、ゴジラの存在が明らかになるが、その際に以下のようなやり取りがある。

林田: 彼が見たモンスターというのはゴジラです。

辺見: ゴジラ…。

林田: 私は奥村君をよく知っていますが、信頼できる人間です。

辺見: やっぱりそうでしたか。事実とは信じたくなかったが、それにしても、第五八幡丸の乗組員の死体はなぜあのような？

林田: 巨大なフナムシによって、体内の全ての血液と水分を吸い取られたからです。たかが数センチのフナムシがどうして巨大化したかといえば、ゴジラに寄生していたからです。ゴジラの体内から発する放射性物質を、絶え間なく浴び続けることで巨大化したんでしょう。

林田を新聞記者の牧吾郎が取材した際には、以下のようなやり取りがあった。

牧: 先生、ゴジラは動物なんですか？ 放射能が作り出した怪獣、化け物。ほとんどの人がそう思っていますが。

林田: その化け物を作り出したのが人間だ。人間の方がよっぽど化け物だよ。ゴジラはいわば核兵器のようなもんだ。

牧: 核兵器？

林田: それも生きた核兵器だ。勝手気ままに動き回り、破壊を繰り返す。その上、ゴジラの生命は不滅ときている。

その後、ゴジラはソ連(当時)の原子力潜水艦を襲うが、その際に艦長が「この最新鋭艦を沈めるつもりなら、全面核戦争の覚悟が必要だ」と述べている。ゴジラが存在が公表され、政府内にゴジラ非常緊急対策本部が設けられ、そこで新兵器スーパーXについて次のような説明があった。

防衛庁長官：えー、首都防衛のために極秘に開発されたものです。外装はチタン合金。集積回路にはプラチナを多量に使用して、かなりの高熱にも耐えることができるよう設計されている。

統幕議長：さらに現在、対ゴジラ作戦のためカドミウム砲の装備を急いでおります。カドミウムは原子炉の核反応を制御する働きがあり、ゴジラに対して有効と確信しております。

ゴジラの行方が分からない中、林田たちは日本に来るか否かを話し合っていた。その会話は、

奥村：日本に来ますか？

林田：問題はそこだ。ゴジラがその食性に従い、エネルギー源となる核分裂物質を求めてソ連原潜を襲ったのは明らかだ。(中略)来るよ。必ず来る。ここにはゴジラの餌がある。

林田の言葉通り、ゴジラは濃霧の中から突然現れ、静岡県井浜原発を急襲する。原子炉の炉心を取り出し胸に当て、背びれを青白く発光させるゴジラを見た林田は、モニタリングポストの放射能測定器を確認するが、反応はない。林田は「ゴジラが全部吸収してしまったんだ」と述べる。その際、ゴジラが渡り鳥の群れに反応して海に戻って行ったことをヒントに、林田は超音波で誘導し三原山の火口に葬るプランを思いつく。その際に以下のようなやり取りがあった。

奥村：じゃあ、先生はゴジラをどうするつもりですか？

林田：原発で君たちは感じなかったか。30年前、大戸島に現れたゴジラは伝説の怪獣と同一視された。世の中が乱れる時、天変地異が起これば怪獣が現れる。これは世界各地の伝説に見られることだ。ゴジラはまさしく人類の滅びへの警告なんだ。私はせめてゴジラを故郷へ帰してやりたいと願っている。それだけだ。

※ゴジラに対して米ソが核攻撃を提案する場面があるが、「ゴジラが伝える日本国憲法の意義」に詳しく記載したので本稿では割愛する。

いよいよゴジラが東京に上陸する可能性が高まった際、以下のようなやり取りがある。

牧：自衛隊は一気に勝負をかけるつもりですね。カドミウムの溶液をゴジラの体内に吸収させると言っていますが、効果ありますか？

林田：私はゴジラが原子炉だとは思っていない。その方法に興味はないよ。

東京に上陸したゴジラは、スーパーXのカドミウム砲によって一旦は動きを封じられる。しかし、ソ連の攻撃衛星から誤射された核ミサイルを、アメリカが迎撃し成層圏で爆破した際に、電子関連危機が全てダウンしてしまう。その原因を科学技術庁(当時)長官は「宇宙空間や成層圏で核爆発が起きた場合、電磁衝撃波というものが生じ、その結果あのような…」と説明する。その影響で、ゴジラは再び活動を始めてしまった。最終的に、林田の計画が成功し、ゴジラは三原山の火口に墜落していったのであった。

1987年に公開された第17作『ゴジラVSビオランテ』は、前作の続編としてゴジラが襲撃した直後の東京から話が始まる。外国人記者の「ゴジラは三原山火口に墜落していきました。マグマはその火口に怪獣を飲み込んだのです。東京都内の非常警戒体制は解除されましたが、西新宿一帯は立ち入り禁止のまま。スーパーXの回収作業、残留放射能、汚染物質の調査が続けられています…(後略)」というリポートが流れる。そして5年後、三原山火口のゴジラが再び活動を開始したため、防衛庁特殊戦略作戦室はその対応策の一つとして、抗核エネルギーバクテリアの開発に着手する。その際に、以下のようなやり取りがあった。

桐島：アメリカでは既に遺伝子操作により、石油を食べるバクテリアを完成し、海の石油汚染に対して実用化しています。同じように、原発事故などの放射能汚染に対する有効な手段として考えられたのが核物質を食べるバクテリア、抗核エネルギーバクテリア理論なんです。

権藤：核物質を食べる…確かに核をエネルギーとしているゴジラにとっては絶好の兵器だな。

桐島：第一種ゴジラ警戒体制の中に抗核エネルギーバクテリアの研究完成があるのは知ってます。しかし、それは兵器として研究してたんじゃないんです。それに、抗核バクテリアはこの研究室だけではできません。一つにはゴジラ細胞が必要です。

権藤：ゴジラ細胞？

桐島：ゴジラは核を食べます。そのゴジラの細胞には、核を食

べる遺伝子があるはずで、その遺伝子をバクテリアに組み込んで作るんです。

開発のため、桐島がゴジラ細胞が保管されている大河内財団を訪ねた際には、以下のようなやり取りがあった。

大河内:私のプロジェクトに対して、少し批判的だそうだな。

桐島:かなりです。

大河内:いやあ、私だってね、遺伝子工学が人類に与える光の部分だけを見ているわけじゃないんだ。ちゃんと影の部分も忘れないでいるつもりだな。

桐島:それでしたら、抗核エネルギーバクテリアがどんな軍事兵器になるかご存じでしょう。

大河内:核ミサイルを無力化する兵器だ。

桐島:核兵器は最終兵器ではなくなります。そんなものが現れたら世界のバランスは…。

(中略)

大河内:原爆とゴジラにひどい目に遭わされた日本が、ゴジラ細胞から核を越える兵器を作っても、決して悪いとは思わんがね。

抗核エネルギーバクテリアの開発が着手される直前にも、桐島は「確かに私たちがこれから遺伝子操作で作ろうとしているのは、ちっぽけなバクテリアです。しかし、このままいけば遺伝子工学も、原水爆が生んだゴジラに負けない怪獣を間違いないで作ってしまいます」と警告している。

バイオメジャーの暗躍などによって、ついにゴジラが復活してしまう。日本上陸が確実となった時点で、以下のようなやり取りがあった。

黒木:ゴジラは前回、静岡の原発で核物質をたっぷり吸い込んで、エネルギーを充填した後、東京に上陸しております。今回はまだ一度も核物質を補充しておらず、しかも、スーパーXII、ピオランテによってかなりのエネルギーを消耗しております。

官房長官:だからゴジラは原発に向かうって言うんですか？

防衛庁長官:一番近い原発は、高浜 4、大飯 2、美浜 3、動燃ふげん 1、敦賀 2…全部で 12 基。日本の原発の 3 分の 1 だ。そんな所に行かれちゃ。

官房長官:1 つでも原子炉を破壊されれば日本は…。

結局、ゴジラは「緊急態勢最終段階」となるまで高浜原発に接近するものの、ピオランテとの死闘後に抗核エネルギーバ

クテリアが効いて動きが鈍り、日本海へ姿を消すのであった。

1991 年に公開された第 18 作『ゴジラVSキングギドラ』は、ラゴス島に生き残っていた恐竜が、核実験の影響でゴジラになったという設定であった。日本海に眠るゴジラが再び活動を始めることを恐れた日本政府は、23 世紀からタイムワープしてきた未来人の「核実験が行われる前に恐竜をテレポーテーションによってベーリング海に移動する」という提案を受け容れる。提案の際、未来人のウィルソンが「我々がこのたび 20 世紀の日本に来たのは、23 世紀の日本が死滅してるからです」と述べ、さらにグレンチコが「一言で言うと 核汚染です。21 世紀、日本は再び活動を始めたゴジラにより致命的な破壊を受けます。都市の破壊はもちろんですが、特に原子力発電所の破壊による核汚染は、長い間にわたって日本全土に広がり、ついに日本のほとんどは人が住めなくなってしまうのです」と説明している。

恐竜の移動は成功したが、未来人がラゴス島に「トラッド」という生き物を残していったため、その後の核実験によってキングギドラが誕生してしまう。一方、ベーリング海に移動した恐竜は、「大型原潜が火災・沈没 ベーリング海の公海」(新聞記事の見出し)という事故がきっかけとなって、結局はゴジラになってしまっていた。恐竜に核攻撃をして、再びゴジラを復活させようとした帝洋グループの原子力潜水艦を襲い、さらに巨大化して日本に向かう。その際に、グレンチコが「20 世紀は我々の時代と違って、地球上の至る所に核がある。考えてみれば、どこに恐竜をワープしようとゴジラの誕生は避けられなかったかも知れないな。我々がせっかく抹殺してやったのに、愚かな時代。救いようのない原始人どもだ」と述べた。

1992 年に公開された第 19 作『ゴジラVSモスラ』には、原子力に関連した描写はなかった。1993 年に公開された第 20 作『ゴジラVSメカゴジラ』では、メカゴジラの製造現場で「核融合炉テスト開始 30 分前」のアナウンスがあり、さらに今井博司が「動力はレーザー核融合炉。燃料は衛星軌道上に生成される重水素・ヘリウム 3 ペレット」と説明する場面がある。また、ベーリング海のアドノア島で翼竜の化石が見つかり、国立生命科学研究所の調査隊が出向いた際に、ラドンと遭遇する。その際、次のような会話が交わされる。

大前:ラドンだ。

桂木:ラドン？

大前:プテラドンが巨大化した。(中略)核の影響か何かで、

ゴジラと同じことがプテラドンにも起こったんだ。

桂木: そういや、こちら辺は使用済み核燃料の墓場ですよ。

1994年に公開された第21作『ゴジラVSスペースゴジラ』には、原子力に関連した描写はなかったが、1995年に公開された第22作『ゴジラVSデストロイア』は、背びれや体表の発光、熱線の色がこれまでと異なるゴジラが出現することから始まる。それは、ゴジラとリトル・ゴジラが生活するバース島が消滅したことと関連があると考えられた。その原因をGサミットは「バース島が消えた原因は、島の地層に含まれた高純度の天然ウランが、熱水の噴出により核分裂反応を起こした結果ではないかと推定されています」と分析する。さらに、原子力エネルギーの専門家は「ご存じのように、ゴジラの動力源、つまり人間でいう心臓部は原子炉と言われている。その心臓部で今、何かが起こっている」とした上で、日本の学生がインターネットで送ってきた「ゴジラの体内構造に関する私的考察」という論文を紹介した。その著者が山根健吉で、Gサミットにオブザーバーとして加わることになる。

ゴジラの現状について、Gサミットでは、以下のようなやり取りがあった。

小沢: この海水温の高い数値は、ゴジラの中で正常な冷却機能をはるかに超える核分裂が起こっていることを裏付けていると思います。

山根健吉: ゴジラのエネルギーである核分裂は体内の水分によって制御され、空気から吸い込む二酸化炭素で冷却されコントロールされていた。それが、バース島の異変によってバランスを崩し、核分裂が飛躍的に活性化した。

国友: どうなると言うのかね？

山根健吉: ゴジラは果てしなく暴走するかあるいは核爆発を。

国友: 核爆発？

上田: ゴジラが核爆発を起こしたらどれぐらいの被害が？

山根健吉: 想像もできませんが、地球上のどんな核兵器よりも巨大な爆発エネルギーだと考えておいた方がいいでしょう。

小沢: それほどの核エネルギーが一度に解放されれば、最悪の場合、大気圏に火が付き地球が炎に包まれることも。

そして、国会議事堂付近でゴジラが核爆発を起こし、地球が炎に包まれる様子が描かれた。

ゴジラが豊後水道に姿を現した際、対策本部では以下のようなやり取りがあった。

山根健吉: 狙いは原子力発電所だ。核分裂が異常に高進しているのだから、核燃料を欲しがるのは当然です。

麻生: ゴジラが原発を襲うというのに、我々は何も手を出せんのか！

国友: ここで攻撃を加えて、もし核爆発を誘発したら、原発1つの被害の何十倍、何百倍もの惨事です。

そこへ、自衛隊が新兵器のスーパーXIIIを出撃させるという連絡が入った。スーパーXIIIについて麻生は「自衛隊が開発していた多目的の防衛攻撃能力を備えた新兵器で、原発事故や核兵器による攻撃を想定して、強力なカドミウム弾を装備しています。最大の特徴は火器兵器ではなく全てが冷凍兵器であること。メイン砲は超低温レーザー光線で、マイナス200度まで瞬間冷凍できるそうです」と説明する。ゴジラは伊方原発(と思われる)に接近するが、スーパーXIIIの活躍で活動を阻止された。その攻撃を山根健吉は「冷凍弾で冷却し、カドミウムで制御する。完璧な攻撃計画だ」と賞賛する。

冷凍化が限界に達し、ゴジラは再び活動を開始するが原発に向かうことはなかった。その際に、以下のようなやり取りがあった。

山根健吉: ゴジラの核分裂が制御され始めたようです。

国友: 本当か？

山根健吉: 見てください。青いラインが正常、赤いラインが現在の状態。カドミウムが制御剤として効いているようです。

国友: よし！これで核爆発は…。

山根健吉: 何とか避けられるかも知れません。

一安心する一同であったが、ゴジラの心臓部の温度が900度を超えているという連絡が入る。その際、以下のようなやり取りがあった。

山根健吉: 何だって？

麻生: どういうことだ？

山根健吉: 核分裂が制御されているのに、炉心がそれだけの高温ということは内部から溶け出している…。

麻生: ゴジラはどうなるんだ！

山根健吉: メルトダウン！

国友: メルトダウン？

山根健吉: ゴジラの原子炉である心臓部が溶け出し、放射能をまき散らしながら周りのものを溶かし…

小沢: 水素爆発を起こして地球に穴を開けてしまう。

麻生：チャイナシンドロームというやつか！

国友：核爆発は避けられそうなのに、今度はメルトダウン。

山根健吉：1200 度を超えると、確実にメルトダウンを起こします。

ゴジラは東京に上陸したが、炉心温度は 1140 度となってメルトダウンが刻一刻と迫っていた。その際、国立物理化学研究所の伊集院研作は「自衛隊にスーパーXⅢの出動を要請してください。万一、ゴジラがメルトダウンした場合、被害を最小限にとどめるためには、冷却するしか方法はありません。炉心融解の瞬間に、冷凍兵器の全てを集中させるんです」とアドバイスをする。デストロイアとの死闘の末、とうとうゴジラの心臓部は 1200 度に達し、メルトダウンが始まった。表皮が溶け落ち、融解していくゴジラにありったけの冷凍兵器が向けられる。スーパーXⅢの機内でそれを見守っていた黒木翔は、放射能測定器を見て「ものすごい放射能だ…」とつぶやく。

発光して溶けていくゴジラを上空のヘリコプターから見守っていた伊集院と山根ゆかりが、次のような会話を交わした。

伊集院：ゴジラが東京を死の街にして溶けていく。

山根ゆかり：これが私たちの償いなの？

伊集院：償い？

山根ゆかり：科学を、核を弄んだ私たち人類の…

全てが終わったかに思えたその時、山根健吉が「放射能のレベルが急激に下がっていく」と叫んだ。濃い霧の中から、ゴジラのシルエットが浮かび上がり、咆吼したところで映画は終わる(ゴジラジュニアがゴジラになったという設定のようだ)。

5. 第3期と『シン・ゴジラ』における原子力描写

1999年に公開された第23作『ゴジラ 2000 ミレニアム』は、ゴジラが納沙布岬に上陸するところから始まる。この時、ゴジラを追跡していた「ゴジラ予知ネットワーク」(GPN)を主宰する篠田雄二、雑誌記者の一ノ瀬由紀らは、ゴジラに異常接近してしまう。その後で、以下のようなやり取りがあった。

篠田：写真ぐらい撮った方がいいんじゃない？ そのために来たんだろ。

一ノ瀬：やりたかなかったのよ、こんな取材。もうたくさん！

篠田：フィルム、交換した方がいいぞ。

一ノ瀬：ああ、もうっ！

根室の街を通過した後、変電所を徹底的に破壊するゴジラを見て、篠田が「ゴジラは人間の作り出すエネルギーを憎んでいるのか？」とつぶやく。

東京に戻った一ノ瀬は、編集長から取材の続行を命じられるが、その際に以下のような会話を交わす。

一ノ瀬：根室の取材終わったら、コンピュータ関係の雑誌に回してやるって言ったじゃない！

編集長：写ってねえんじゃ話になんねえだろ。身体に影響ない程度の放射能でも、フィルムは感光しちゃうんだよ。

取材のために一ノ瀬がGPN本部を訪れると、篠田が仲間と「放射能濃度はどう？ 異常なしか。じゃあ、地震計の方はどうかな？」というやり取りをしていた。

一方、海底で発見された未知の物質をめぐって、危機管理情報局(CCI)で宮坂四郎は局長の片桐光男と、以下のような会話を交わす。

宮坂：強い磁力を持った物質で、もしかしたらウランを超える新しいエネルギー資源になり得るかもしれません。

片桐：隕石か？

宮坂：恐らく。この発見がクリーンエネルギーにつながれば、我々CCIが取り組む意味も十分にあると…。

根室から一旦姿を消したゴジラは、太平洋を南下していた。その動きをめぐって、以下のようなやり取りがあった。

園田：微震はさらに南下している模様。この分だと…

篠田：東海村の原発！

園田：たぶん。

一ノ瀬：原発が破壊されたらどうなるの？

それと同じ頃、CCIの片桐は東海村の所員と以下のようなやり取りをしていた。

片桐：危機管理情報局の片桐です。ゴジラが東海村に上陸する恐れがある。ただちに原子炉の運転を停止してください。

所員：停めると言っても、私の一存では…。

片桐：私は非常時における緊急対応を内閣から一任されているんだ。ただちに原子炉を停めろ！

そして、東海原発は緊急停止された。想定通りに原発の沖合にゴジラが出現するが、原発の破壊は免れた。

2000年に公開された第24作『ゴジラ×メガギラス G消滅作戦』は、映画館で上映される「日映ニュース」から始まる。まず

「魔獣ゴジラ東京を襲う！」として、1954年にゴジラが東京を襲撃したニュースが流れた。続いて場面が変わり、「1966年茨城」のクレジットと共に、東海原発に迫るゴジラが映し出される。「ゴジラの東京襲撃から12年後、操業を開始したばかりの我が国初の原発、東海原子力発電所がゴジラによって破壊された」というアナウンスとともに、原発を破壊するゴジラが描かれた。さらに、首相官邸前の中継に切り替わり、「たった今、総理が決断をしました」「原子力発電の永久放棄ですか？」「その通りです」という中継が行われる。そして「ゴジラ上陸の原因が原子力発電所の放射能であるとの研究結果を受け、日本政府は原子力発電の永久放棄を決定したのである。その後、増加する電力需要に対処すべく、政府は水力、火力、ソーラー、風力などの発電に力を入れたが、原子力発電を補うまでには至らなかった」というナレーションがあった。

時代が現在になってから、太平洋になぞの光源が見つかった際、以下のようなやり取りがあった。

美馬：さっきG衛星から送られてきた画像なんですがね。

辻森：太平洋ね。

職員：この光、分析してみたんですけど、スペクトルから見ても普通の光じゃないんですよ。

奥村：熱線ですか、ゴジラの？

辻森：周囲の温度変化と放射能濃度は？

職員：計測中です。(中略)放射能反応が出ました。ゴジラです！

その後、現場海域の調査に向かった辻森たちにゴジラが接近する。すると辻森は防護マスクを装着し、ゴジラに取り付こうと試みる。その際に、危険を知らせるアラームが鳴った。

2001年に公開された第25作『ゴジラ・モスラ・キングギドラ 大怪獣総攻撃』では、アメリカの原子力潜水艦の事故から物語が始まる。それを伝えるニュースは「グアム島沖で消息を絶ったアメリカの原子力潜水艦救助のため、政府は日米平和条約に基づき、防衛海軍を現場海域に派遣することを決定しました。原子炉からの核汚染が予想され、我が国の放射能遮蔽式作業艇“さつま”の活動が期待されています」という内容であった。

小笠原諸島の孫の手島を襲撃したゴジラが、静岡県焼津港に上陸した際、漁協の壁には「死の灰の記憶・原水爆のない未来を・第五福竜丸の悲劇を絶対忘れてはならない」というポスターが貼られていた。また、上陸したゴジラが最初に熱線

を吐いた際、遠方の小学校の窓からは白いキノコ雲が見えるが、その際に教師が「原爆？」とつぶやく。

映画のラストで、ゴジラとの闘いを終えた立花泰三准将に、娘の由里が駆け寄ろうとすると、「そこで止まれ。残留放射能を確認していない。念のためだ」と制する場面があった。

2002年に公開された第26作『ゴジラ×メカゴジラ』では、1954年に日本を襲ったゴジラの骨(房総半島沖から引き上げたもの)を組み込んだ生体ロボット三式機龍(メカゴジラ)が登場する。原子力関連の描写はほとんどないが、ゴジラと対峙した機龍が、その咆吼に反応した際に記憶の中に水爆実験と思われる巨大なキノコ雲が登場している。また、暴走した機龍について湯原沙羅が「水爆でゴジラを生んで、今度はゴジラのサイボーグ。一番悪いのは人間よ」と語る場面があった。さらに、ゴジラとの戦いで故障した機龍への接近が検討された際には、赤松伸治が「何言ってるんだ、危険すぎる。辺りはゴジラの熱線で放射能に汚染されている可能性があるんだぞ」と叫んでいる。その後、機龍の内部に家城茜が入ると、放射能除去装置が作動するという場面が続く。

2003年に公開された第27作『ゴジラ×モスラ×メカゴジラ 東京SOS』は続編であったが、中條信一が総理大臣の五十嵐隼人に「すでに人間は原水爆によってゴジラを生むという過ちを犯している」と、機龍の放棄を進言する場面があった。また、前作と同様に、ゴジラの咆哮によって機龍の記憶の中に水爆実験と思われる巨大なキノコ雲が登場しているとともに、戦闘中に内部に入った際には放射能除去装置が作動していた。

2004年に公開された第28作『GODZILLA FINAL WARS』でも、原子力に関連した描写はほとんどなかったが、福井県に上陸したゴジラが街を破壊している際に老人と孫との間で以下のような会話が交わされる。

健太：ねえ。なんでゴジラは街をこわしているの？

佐門：ああ。お前が生まれるずっと昔な、人間が恐ろしいことしてしまってよ。ゴジラを怒らしてしまったんだよ。

健太：恐ろしいこと？

佐門：おお。お前にはまだ分らんだろうがよ。とてつもないでかい火を起こしてよ。あらゆるものを焼き尽くしてしまったんだよ。そんな時の怒りを決してゴジラは忘れねえんだ。

第28作をもって、少なくとも日本のゴジラシリーズは文字通り「FINAL」を迎えたと思われた。だが、佐藤健志が「2011年、ゴジラは架空の存在ではなくなった。この怪獣、1954年から

2004年にかけて、日本各地に繰り返し来襲、少なからぬ被害をもたらしてきたが、それは映画という虚構の世界においてのことだった。しかるに2011年3月11日、東北地方の太平洋沖に出現したゴジラはそのまま上陸、沿岸各地に大打撃を与える。以後もゴジラは福島県に居座り、放射能火炎を吐いたり、背ビレを繰り返し発光させたりしている。そのたび周囲には放射性物質がまき散らされ、汚染の拡大が大きな社会問題、ひいては国際問題となった⁹⁾という事態が訪れた。そして2016年、第29作『シン・ゴジラ』が公開され、ゴジラは再び銀幕の世界に戻ってきたのである。

第29作ではまず、ゴジラ第2形態および第3形態の出現後、巨大不明生物特設災害対策本部(巨災対)において、以下のような検討が行われる。

立川: 素朴な疑問なんだが、あれのエネルギー源は何なんだ？

安田: 確かに身体の活動だけではなく基礎代謝だけでも、かなりのエネルギー量が必要です。消化器官による酸素変換では、消費量や動作効率が説明できませんね。

尾頭: あれだけのエネルギー…まさか核分裂？

安田: フッ、冗談ポイです。尾頭さん。あり得ませんよ。

その後、横須賀のアメリカ軍空母が緊急出港したとの連絡が入り、以下のようなやり取りがあった。

郡山: そうだ。先ほど横須賀市の放射線モニタリングポストに反応があるとの報告が入った。

矢口: 分かりました。至急、原子力規制庁に確認します。

矢口が原子力規制庁に確認し、

根岸: はい。上から止められているので公表を差し控えてますが、都内各地の放射線モニター空間線量に軽微な上昇が認められます。

矢口: どこから漏れてると考えられますか？ 原発ですか？

根岸: いえ。全国すべての原子力施設での放射性物質のリークは確認されておりません。

矢口: じゃ発生源は何なんだ。

その時、安田が奇声を上げる。

安田: わあっ！ わあ、こんなアリか！

尾頭: このサーベイデータって、あの巨大生物の移動ルートと完全に一致しています。

ゴジラが放射能を帯びていることが明らかになって、官房

長官らが以下のようなやり取りをする。

東: 面倒だな、これは。

矢口: だからこそ長官か総理が直ちに会見を開くべきです。

森戸: とはいえ、発生源は特定できず、先の生物との関連性も不明なままの公式発表は、いたずらに不安をあおることになります。

赤坂: 行政が避難指示を出す線量値でもない。すぐに政府が動く法的根拠もありません。

矢口: しかし、いくら軽微とはいえ、放射性物質の案件です。

東: そうだな。私がやろう。総理には話しておく。

一方、現場で回収された放射性物質の分析結果について以下のやり取りがあった。

根岸: 現場で回収された放射性物質の分析結果です。検出されたガンマ線の波長が既存のそれと一致しません。大発見ですよ。ゴジラでしたっけ？ その体内には未知の新元素が存在しています。

赤坂: DOEも絡んだ米国の素早い動きはこれが事由か。総理に連絡だ。

報告を受けた総理は「放射能とはまた面倒な話だ。で…どこまで言っていないんだ？」とした後で記者会見を開き、「ゴジラの通過経路で回収された物質を分析した結果、被災地付近で0.5マイクロシーベルトという…」と発表する。

巨災対ではゴジラへの対処が以下のように検討される。

立川: そういえば、先の上陸時、なぜ急に東京湾に戻ったんだ？

間: そうか！ 冷えてないんだ。ゴジラはおそらく体内に原子炉のようなシステムを有していて、背びれ等から常時放熱してる。だが、それは余熱調整の補助で、メインは血液流を冷却機能としての可能性が非常に高い！

安田: だから最初の形状変態時は体温調整がまだうまく働かず、一時的に退化し海中に戻ったと推測できます。

根岸: そこから考えられる即応可能な唯一の対処方法が、体内冷却システムの強制停止です。

尾頭: 停止されると、ゴジラは生命維持のため自ら反応炉をスクラム状態にせざるを得ないと思われます。その過程で急速な冷却を必要とするので、死に至るかは不明ですが、少なくとも活動の凍結は可能です。

町田: そのための血液凝固促進剤の経口投与の可能性を提

案すべきと考えます。

ゴジラの出自について、アメリカ大統領特使のカココ・アン・パターソンが巨災対メンバーに対して「太古から生き延びた海洋生物が奇跡的に生きながらえていた生息地域に、偶然大量の放射性廃棄物⁽¹⁰⁾が海中投入され、その影響下で生き残るため放射線に耐性を持つ生物へと急速に変化した」と説明がなされた。水爆実験と不法投棄された放射性廃棄物という違いはあるものの「人の手によって生み出されてしまった放射性因子を帯びた怪獣」という点は第1作と同様であった。

鎌倉に第4形態が出現した際、政府内では以下のような検討がされた。

葉山：配付資料にある通り、攻撃に際し、体内の放射性物質の拡散等のリスクが存在しますが、再び首都蹂躪を許すわけにいかず、ここは進行阻止を優先すべきと考えます。

河野：ゴジラは放射性物質が補給源と聞く。もしも原子力関連施設を襲われたら、ゴジラより大変なことになる。

攻撃開始前、現場指揮官は「目標は体内に放射性物質を有している。よって攻撃は頭部と脚部のピンポイントのみとする。改めて全部対に徹底させる」と指示する。

東京に侵入しゴジラは甚大な被害をもたらすが、その状況は以下のように伝えられた(いずれも音声のみ)。

アナウンサー：高い放射線量が予想されます。都民の皆さんは発生時から49時間は屋内 待機…

自衛官：ゴジラはどれほどの放射性物質を東京に放出したんだ。

機動隊員：そっちにホットスポットが確認されている。バリケードテープの右に入らないように。

都庁担当者：サーベイ対象者が多すぎる。隔離の基準数値を下げないと現場がもたない。

消防庁職員：二次災害が起こる恐れがある。防護服のない救援隊は災害現場に入らないように。

立川の臨時災害対策本部に着いた矢口らは、以下のようなやり取りをする。

職員：この先の風評被害は想像もつかない。報道への対応を急いでくれ。

矢口：とにかく情報をくれ。あるだけでいい。今ゴジラはどうなってる？

泉：今も活動停止したまま。停止の理由は目下のところまるで

不明だ。

矢口：放射線量の状況は？

泉：原子力規制庁は何とか被害を免れた。今、都内のサーベイででてこ舞いだ。ゴジラの方は口から微量の放射性物質を今も出しているが、この程度なら問題ないらしい。

久松：ゴジラによるブルームは房総沖に抜けたそうですが、かなりの広範囲に高濃度な汚染が…。

矢口：直撃を受けた都内3区は帰還困難区域となる恐れがある。除染の問題も大きくなるだろう。

活動を停止しているゴジラを監視する自衛官の間で、以下のようなやり取りがあった。

士長：空間放射線量はほぼ動きがないですね。0.8から1シーベルト付近で安定しています。

二曹：寝相はいいんだな。

小隊長：その分、腹にエネルギーをためてるってことだ。

アメリカから派遣された科学者たちが、ゴジラが飛翔体に進化する可能性もあることが明らかになると「その時は人類の終わりだ。その前に、人類の叡智の炎を使うしか救いの道はない」として、核兵器の使用を大統領に進言する。それを受けて、矢口とカココが以下のような会話を交わす。

カココ：ワシントンで国防長官がGodzilla…いえ、ゴジラの処分に熱核兵器を使用すべきと主張している。

矢口：ホワイトハウスの動向は？

カココ：西海岸へのゴジラ上陸の可能性が13%というレポートが大統領に上がった。国連大使は安保理に対して、対ゴジラ専門の多国籍軍の設置工作を始めたそうよ。

矢口：米国は本気か？

カココ：本気ね。横田と本国の研究チームが、弾道ミサイルによる核攻撃しか術がないとの結論を出した。ペンタゴンは既にB83核弾頭の爆発規模選定と、有効な爆発高度設定のチームが動いているそうよ。

矢口：このまま東京で使う気か？

カココ：私に即時退去命令が出た。

矢口：そうか。その可能性が高い…ということだな。

カココ：だからこそ今は戻らない。祖母を不幸にした原爆を、この国に3度も落とす行為を、私の祖国にさせたくないから。

多国籍軍の核攻撃決定を受けて、赤坂と矢口は以下のような会話を交わす。

赤坂:熱核兵器の直撃。数百万度の熱量に耐えられる生物はいない。確実に駆除するなら核攻撃は正しい選択だ。

(中略)

赤坂:それに巨大不明生物の核攻撃を容認すれば、復興時の全面的支援を世界各国から約束される。巨大不明生物を確実に処理できなければ、日本は世界の信用を失う。多国籍軍の核攻撃に頼るしかない。巨大不明生物を消した後の日本のことを考えるのが私の仕事だ。

矢口:今なら東京 3 区の被害で済みます。まだ東京の復興は可能です。核を使えば、それも難しくなります。

赤坂:既に東京の経済機能はないに等しい。円も国債も株価も暴落し続ける現状では、復興どころかデフォルトの危機にさらされている。日本には国際社会からの同情と融資が必要だ。

矢口:国の復興が最優先ですか…。

赤坂:この国を救う道は他にはない。

赤坂はまた、360 万人の疎開ということや、東京都知事が反対していることに対しては「国の重要決定事項だ。自治体レベルの話じゃない」と一蹴。「巨大不明生物が活動を再開した時点で、熱核攻撃の開始時刻は無条件に繰り上がる。その時は犠牲者もやむを得ないとし、速やかに戦略原潜の弾道弾による熱核攻撃を開始するというのが安保理と多国籍軍の決定だ」とし、「遠いアジアの出来事だからって無茶苦茶言いやがる！」と悔しがる官僚に対して、「たとえここがニューヨークであっても、彼らは同じ決断をするそうだ」と返す。

ゴジラを凍結させる「ヤシオリ作戦」の開始前に、矢口は「今回のヤシオリ作戦遂行に際し、放射線流の直撃や、急性被曝の危険性があります。ここにいる者の生命の保証はできません。だが、どうか実行してほしい」と訓示した。作戦実行直前、現場では以下のようなやり取りがあった。

丹波:対策副本部長。こちらはいつでも行けます。

甲斐:しかし、都庁から避難完了の報告がまだです。

矢口:いえ、この機は逃せません。決行します。自治体には屋内待機を徹底してください。丹波一佐お願いします。

丹波:分かりました。関東地区の各自治体に連絡。以降 50 時間の一切の外出自粛と、全住民の屋内待機を要請。

また、作戦実行中には以下のようなやり取りがある。

根岸:新たな汚染区域が拡大しています。

丹波:副本部長。積線量が予定値を超えます。

矢口:今やめたら、すべてが無駄になります。このまま攻撃を続行してください。

甲斐:ゴジラブルーム、予想値の 2 倍を超えます。

丹波:ひるむな！ 耐えるしかない。

最終的に「ヤシオリ作戦」は成功する。その後、巨災対では以下のようなやり取りがあった。

尾頭:あの。このサーバイデータを見てください。

間:ああ。ゴジラの新元素、半減期が 20 日程度だったのか。

森:これだと 1 ヶ月で半分以下。2~3 年でほとんど影響がなくなる。

尾頭:ええ、これで都内の除染に光明が見えます。よかった。

そして、現場では自衛隊員が作戦に使用した車両の除染作業を続けているのであった。

おわりに

ここまで、ゴジラ映画 29 作品について、登場人物の台詞や場面で原子力に関連したものを可能な限り詳細に抜き出してきた。紙幅の都合上、映画のどの場面で、あるいはどのような文脈で登場した台詞や場面なのかが明記されていないケースが少なからずある。今回は、あくまでも核兵器や原発、放射能といったものが、どのような形で取り上げられたのかという点に絞って検証しているため、そのメッセージ性や効果の分析は別の機会に譲るものとする。

まず第 1 期においては、第 1 作を除いた 14 作品では「ゴジラが子どもたちに伝えたかったこと」で示した以下のようなパターンで原子力が描かれていたことが、改めて確認できた。

- ①核実験の実施を伝える、あるいはそれを批判する。
- ②ゴジラや怪獣、外敵に対して核兵器の使用が検討される。
- ③ゴジラが存在を放射能の有無で探知する。
- ④危険地域などに入った際に放射能の有無を確認する。

この時期の日本社会は、原子力の「平和利用」に明るい未来を見出す風潮が強かったはずなのだが、映画の中で原子力を肯定的に捉えた描写は第 3 作、第 8 作以外にほとんど見られなかった。

第 2 期は、原発の登場が最大の特徴である。特に 1986 年に起きた旧ソ連チェルノブイリ原発事故後の第 17 作以降の作品では、原発事故あるいはゴジラが原発を襲うという設定や場面が見られるようになる。もっとも、原発についての是非、ある

いは原発への問題提起はほとんどなかった。そして、第1期では不明であったゴジラの食性が、第16作で明らかにされてからは、「エネルギー源として核物質を吸収する」という前提でゴジラは原発や原子力潜水艦を襲撃するようになった。のみならず、ゴジラの体内構造も原子炉と同様のものとされ、第1期(第1作と言った方が良くかもしれない)では「水爆大怪獣」であったゴジラが、第2期では原発を象徴する怪獣というイメージに置き換えられていった。高橋敏夫は『水爆大怪獣』はゴジラのほんの一部をいいあらわすにすぎない。ゴジラは戦後日本社会における諸問題の束であり、それゆえに『大怪獣』なのである⁽¹¹⁾と述べている。第1期、特に前半のゴジラが「核実験(核兵器)」の恐怖を体現していたとするならば、第2期のゴジラは「原発事故」の恐怖を体現していたと言えよう。

第3期に入ると、原子力関連の描写は極端に少なくなっていく。前出・高橋は「ゴジラの存在感は映画のたびに確実に希薄化しつつあった。1984年からはじまった新ゴジラシリーズでそれは著しかった。新しい映画の目玉はゴジラではなく、つぎつぎに登場する『VS怪獣』または『対ゴジラ兵器』であった⁽¹²⁾と述べている。それでも何かしらの描写を通してゴジラを原子力と結び付けていた第2期と違い、第3期は「ゴジラと原子力」という点ではまさにこの分析通りに、ゴジラの存在感は希薄化していたのであった。そして、この分析に従ってゴジラと原子力との結びつきを考えた場合、ゴジラが単体で登場する第1作、第16作、そして第29作を詳細に比較検証する必要性が、今後の課題として見えてくる。

ところで、ゴジラ以外の特撮映画も詳細に検証している前出・好井は『ゴジラ』⁽¹³⁾では、誰に対して、どこに対しての怒りかは曖昧さが残るものの、反原水爆、反戦のイメージが明瞭であった。その後1950年代後半の特撮映画では「反」というメッセージが希薄になり、世の中に起こりえない怪異や異常をもたらす「わけ」として原水爆イメージが利用されていた。それは1954年3月に起きた第五福竜丸事件を想起させる、被曝の現実や原水爆実験とどこかで繋げておこうとするリアルな恐怖としての原水爆イメージの喚起だったのである⁽¹⁴⁾と述べている。確かに、反原水爆や反戦のメッセージのために原子力描写がなされているのは第1作のみであった。第28作までのゴジラは、映画の中に直接の描写がなくても、その出自が水爆実験であることが前提になってはいた。だが「リアルな恐怖としての原水爆イメージ」、その上で原水爆への怒りをも喚起できるのは第1作だけである。「水爆大怪獣」の称号

は第1作のゴジラのみを与え得るものなのかもしれない。

最後に、第29作について触れておきたい。この映画のキャッチコピーは「現実(日本)VS虚構(ゴジラ)」であったが、その言葉通り、ゴジラ以外は全て「現実」が描かれていた。登場する政府組織も巨災対を除けば全て実在のものであったし、使用される兵器も自衛隊やアメリカ軍が実際に保有しているものであった。ゴジラ攻撃に使用されたカヨコ・アン・パターソンの台詞に出てくる「B83核弾頭」は、アメリカが保有する最新型の核弾頭で、起爆高度が調整可能で空中爆発から地表面での爆発、地中貫入後の爆発などが設定できる典型的な戦術核兵器である。そして、ゴジラの出自は核実験ではなく、不法投棄された放射性廃棄物となっていた。

この作品が、福島第一原発事故の影響を強く受けていることは明らかで、第2形態が多摩川河口を経て呑川を遡上する場面は東日本大震災における津波を想起させるものであったし、第4形態が放った放射線流による被害を上空から見た場面は、原水爆によるものには程遠くむしろ原発事故における放射能の拡散図を想起させるものであった。映画では「空間線量」「屋内待機」「ホットスポット」「風評被害」「帰還困難区域」「除染」などの言葉が次々と登場するが、どれも福島第一原発事故以前には一般的に耳にする機会が少なかったものばかりである。つまり、第29作は現在の日本の状況を極めてリアルに反映した作品に他ならない。

それだけに、特に核兵器に関する描写が問題となってくる。第29作以前のゴジラ映画において、核兵器は「史上最強の兵器」であると同時に、「絶対に使ってはならないもの」として扱われてきた。第16作の旧ソ連による「誤射」を除いて、ゴジラや外敵に対して核ミサイルが発射されることは一度もなく、検討されることがあっても決して認められてはこなかった。だが、第29作では発射されることこそ食い止められたが、核ミサイル発射のカウントダウンが始められているのだ。第16作で、ゴジラに対する戦術核の使用を米ソが迫った際、三田村清輝首相は両国首脳に「もしあなた方の国、アメリカとソ連にゴジラが現れたら、その時あなた方は首都ワシントンやモスクワでためらわずに核兵器を使える勇気がありますか」と迫ったが、「両国首脳は納得してくれた」。しかし、第29作では同じようなシチュエーションで赤坂秀樹官房長官代理は「たとえここがニューヨークであっても、彼らは同じ決断をするそうだ」と言い放っている。約30年前と比較して、明らかに核兵器が使いやすい状況になっているのではないだろうか。

実は、私はかつて「ゴジラが子どもたちに伝えたかったこと」の最後をこう結んでいた。「もしこのままゴジラが子どもたちにとって単なる『人気怪獣』に終始し、そして時間とともにその世界からも姿を消していったとしたら…。近い将来、必ずゴジラは核戦争、あるいは巨大原発事故に姿を変えて現実の世界を襲うことになるであろう。ゴジラが、今も私たちの身近に在ることを決して忘れてはならないのだ⁽⁴⁵⁾。悲しいかな、後者は現実のものとなってしまったが、このままではいつか前者も実際に起こってしまうかもしれない。近年の核兵器をめぐる国際情勢をみていると、それは決して杞憂ではないはずだ。

第29作は、ゴジラに向けた核ミサイル発射のカウントダウンは「一時中断」で、万が一活動を始めた際には再開するという設定だ。主人公の矢口蘭堂が、東京駅前で凍結したゴジラを見据えて「事態の収束にはまだ程遠いからな」と言って映画は終わる。この言葉は今の日本、そして世界の状況を端的に表してはいまいか。事故を起こした福島第一原発は、まさに収束には程遠い状況であるし、核廃絶に至っては全く展望が見えないという現実には私たちは生きているのだ。私たちは改めて、ゴジラと向き合うことが求められているのである。

(文中敬称略、引用は原文のまま)

【脚注】

- (1)日本で制作された実写版のみをカウントしている。
- (2)西尾宣明・中村博武・伊藤宏編『子どもへの視点』(聖公会出版、2005)P149-188
- (3)佐藤健志『さらば愛しきゴジラよ』(読売新聞社、1993)P76
- (4)信愛紀要 59号 P107-118
- (5)本稿で参照したものは、2005年4月発売のゴジラ生誕50周年記念DVD30枚組「Godzilla Final Box」所収の『怪獣王ゴジラ(海外版)』である。
- (6)以下、映画の中の台詞は『怪獣王ゴジラ(海外版)』の字幕による。
- (7)山本昭宏『核と日本人 ヒロシマ・ゴジラ・フクシマ』(中公新書、2015)P31
- (8)好井裕明『ゴジラ・モスラ・原水爆 特撮映画の社会学』(せりか書房、2007)P11
- (9)佐藤健志『震災ゴジラ 戦後は破局へと回帰する』(VNC、2013)P2
- (10)世界各国によって不法に投棄されたものという設定。
- (11)高橋敏夫『ゴジラの謎 怪獣神話と日本人』(講談社、1998)P55
- (12)高橋・前掲書 P39
- (13)1954年公開の第1作
- (14)好井・前掲書 P223
- (15)西尾・中村・伊藤・前掲書 P183

【引用・参考文献および資料】(著者 50音順)

- ・青井邦夫他『初代ゴジラ研究読本』洋泉社、2014
- ・赤坂真理他『「シン・ゴジラ」をどう観るか』河出書房新社、2016

- ・赤坂憲雄『ゴジラとナウシカ』イースト・プレス、2014
- ・和泉正明『公理的ゴジラ論』アートン、1998
- ・ウィリアム・M・ツツイ『ゴジラとアメリカの半世紀』中公叢書、2005
- ・小野俊太郎『ゴジラと精神史』彩流社、2014
- ・小野俊太郎『新ゴジラ論 初代ゴジラから「シン・ゴジラ」へ』彩流社、2017
- ・柿谷哲也『シン・ゴジラ機密研究読本』富士見書房、2017
- ・笠井潔『テロとゴジラ』作品社、2016
- ・片山杜秀『ゴジラと日の丸』文藝春秋、2010
- ・加藤典洋『さようなら、ゴジラたち 戦後から遠く離れて』岩波書店、2010
- ・川北紘一監修『僕たちの愛した怪獣ゴジラ』学習研究社、1996
- ・倉谷滋『ゴジラ幻論 日本産怪獣類の一般と個別の博物誌』工作舎、2017
- ・クリストフ・フィアット『フクシマ・ゴジラ・ヒロシマ』明石書店、2013
- ・小林豊昌『ゴジラの論理』中経出版、1992
- ・佐藤健志『ゴジラとヤマトとぼくらの民主主義』文藝春秋、1992
- ・佐藤健志『さらば愛しきゴジラよ』読売新聞社、1993
- ・佐藤健志『震災ゴジラ 戦後は破局へと回帰する』VNC、2013
- ・世秋恭之介『あるゴジラに関する報告』文芸社、2001
- ・高橋誠一郎『ゴジラの哀しみ 映画《ゴジラ》から映画《永遠の0》へのべる出版、2016
- ・高橋敏夫『ゴジラの謎 怪獣神話と日本人』講談社、1998
- ・高橋敏夫『ゴジラが来る夜に「思考をせまる怪獣」の現代史』集英社文庫、1999
- ・宝田明『ニッポン・ゴジラ黄金伝説』扶桑社、1998
- ・宝田明『銀幕に愛をこめて ぼくはゴジラの同期生』筑摩書房、2018
- ・但馬オサム『ゴジラと御真影 サブカルチャーから見た近現代史』オークラ出版、2009
- ・田中友幸他『ゴジラ・デイズ ゴジラ映画40年史』集英社、1993
- ・中沢健『平成特撮時代 新時代のゴジラ、ガメラ、ウルトラマン&仮面ライダー』洋泉社、2017
- ・長山靖生『ゴジラとエヴァンゲリオン』新潮新書、2016
- ・西川伸司『ゴジラ狂時代』復刊ドットコム、2016
- ・花田俊典『沖縄はゴジラか (反)オリエンタリズム/南島/ヤポネシア』花書院、2006
- ・ピーター・ミュソッフ『ゴジラとは何か』講談社、1998
- ・別冊映画秘宝編集部編『ゴジラとともに』洋泉社、2016
- ・別冊宝島編『ゴジラ完全解説』宝島社、2014
- ・本多猪四郎『「ゴジラ」とわが映画人生』実業之日本社、1994
- ・本多さきみ『ゴジラのトランク 夫・本多猪四郎の愛情、黒澤明の友情』宝島社、2012
- ・藤田直哉『シン・ゴジラ論』作品社、2017
- ・ましこひでのり『ゴジラ論ノート 怪獣論の知識社会学』三元社、2015
- ・ミック・プロデリック編『ヒバクシャ・シネマ』現代書館、1999
- ・未来防衛研究所『ゴジラ対自衛隊』銀河出版、1998
- ・八本正幸『ゴジラの時代』青弓社、2014
- ・山口理『ゴジラ誕生物語』文研出版、2013
- ・山本昭宏『核エネルギー言説の戦後史 1945-1960』人文書院、2012
- ・山本昭宏『核と日本人 ヒロシマ・ゴジラ・フクシマ』中公新書、2015
- ・好井裕明『ゴジラ・モスラ・原水爆 特撮映画の社会学』せりか書房、2007